

令和3年度 学校評価結果報告書 (年度末結果報告書)



令和3年度卒業証書授与式



フロンティアⅡ全体発表会



オープンスクール



修学旅行

呉市立呉高等学校

令和3年度学校経営計画

令和3年度～5年度

校番	1	学校名	呉市立呉高等学校	校長氏名	中舛 俊宏	全日制	本校
----	---	-----	----------	------	-------	-----	----

1 教育目標

地域課題を発見し、その解決に貢献しようとする意識と、持続可能な社会の担い手として新たな価値を生み出す力を有する、心豊かでたくましい人材を育成する。

2 育てたい生徒像

当たり前のこと（挨拶・服装整齊・時間厳守・清掃等）を高いレベルで実現できる生徒。
 自身が定めた目標の実現に向けて不断の努力ができる生徒。
 「自立」と「自尊」の精神を備え、高い貢献の意識を有する生徒。

3 中期（3年間）経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標	評価指標	目標値	実績値	
			初年度	次年度
希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。	第1 志望達成率	85%	95.6	—
総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により、課題発見・解決能力を高める。	身に付けさせたい力の伸長に対する自己評価	1年 60% 2年 70% 3年 80%	1年 81% 2年 75% 3年 88%	—
生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。	規範意識に対する肯定的評価	90%	99.3	—

【評価基準】

A: 目標を完全に達成した。 B: 目標を概ね達成した。 C: 目標をあまり達成できなかった。 D: 目標をまったく達成できなかった。

ESD・SDGsの視点を取り入れた教育内容づくりの推進	「産業社会と人間」ライフプラン策定、「フロンティアI・II」の体系的指導	意識調査の「身の回りの出来事や様々な側面や立場から考えている」の最肯定の割合	1年 60% 2年 70% 3年 80%	1年 81% 2年 75% 3年 88%	A	学校評価アンケート14で見取ると、生徒全体の80%が自分の取組に深まりを感じているため。	教育研究
特色ある学校設定科目の教育内容の充実	「防災」選択者の「防災リーダー」としての育成	選択者の校内外での活動回数	年 3回	5回	A	1学期には、自衛隊2回と呉市復興総室と1回、2学期には消防署と2回連携を行ったため。	教務
	「看護基礎」「福祉基礎」「子ども文化」「調理2」における専門機関とも連携した高度な教育内容の提供	専門機関等との連携回数	各年 2回	計 9回	A	「子ども文化」・「調理2」等、家庭科科目は、年間計5回、「看護基礎」・「福祉基礎」は広島文化学園大学と連携、さらに「福祉基礎」は、2団体と連携を行ったため。	教務
生涯学び続ける意識の醸成	資格取得の促進	1種目以上合格した生徒の割合	50%	37%	B	意欲づけが十分ではなかったため。より充実を期したい。	教務
	読書習慣の確立	年間10冊以上読んだ生徒の割合	10%	1年 5.4% 2年 7.7% 3年 6.3% 全体 6.5%	B	図書委員会からの呼びかけだけでなく、担任からの読書活動へのさらなる啓発が必要である。	教育研究
グローバルに活躍する人材の基礎の醸成	姉妹校との相互交流によるグローバルマインドの向上	安楽高級中學等との相互交流の回数	3回	2回	B	今年度はコロナ禍により、安楽高級中學との学校間訪問ができなかった。5月にブレマトン市オリンピック高校、10月に昌原市大巖高校とのオンラインによる交流を行ったため。	総務企画
	異文化理解促進のための交流の場の積極設定	異文化理解に繋がる実践の回数	3回	3回	A	1・2年次生のホームルーム活動で「国際理解と国際協力」をテーマに実施した。また、10月に日露交歓コンサートを全生徒で視聴した。	総務企画

中期（3年間）経営目標

（3）生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。

短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	目標	実績値	評価	理由	担当分掌
規範意識や社会性を高める	時間・期限への意識を高める	1日の遅刻者数	1.0	1.24	B	継続指導により全体の数値がほぼ目標値を達成したため。	生徒指導
	ルールの意味を考え尊重する意識を高める	特別な指導の回数 (携帯電話によるものを除く)	5回	5回	A	特別な指導に係る事案が5件発生したが、全体としては落ち着いた学校生活を送ることができたため。	生徒指導
		生徒の規範意識に対する肯定的評価	90%	99.3%	A	アンケートの数値より、規範意識が高いと考えられるため。	生徒指導
生徒支援の体制の拡充	教育相談活動を充実させる	教育相談に対する肯定的評価	90%	94.5%	A	生徒指導の三機能による教職員の共通理解が深まり、共感的人間関係に基づく信頼関係が築かれているため。	生徒指導
	困り感のある生徒への具体的支援	全体研修や専門機関との連携、学年会等での協議を経て生徒・保護者にはたらしかけを行った回数	3回	7回	A	全体研修(気になる生徒・配慮を要する生徒)の実施、学年会での連携、担任による教育相談、SCとの連携など計画的に実施できている。	生徒指導
部活動の充実により、活動実績を向上させる	部活動による学校生活の充実	部活動加入率	90%	91%	A	2学期以降、1年生への働きかけ等で加入率が上がり、目標値に達したため。	生徒指導
	適切な目標設定と計画的活動により部活満足度を高める	中国大会以上の大会等への出場、県大会ベスト8以上の進出、またはそれに準ずる成績を収めた部活動数	5団体	5団体	A	コロナ禍で十分な活動ができていないものの、各部の努力により成果がでていたため。	生徒指導

		部活動への取り組みに対する肯定的評価	85%	89%	A	アンケート結果から、積極的に取り組む生徒が多いと考えられるため。	生徒指導
貢献の意識の醸成	ボランティア活動への積極参加と「学び」への連結	ボランティア活動への延べ参加者数	400人	269人	B	コロナ禍により、例年実施されるボランティア活動の大部分が中止となり、参加者数が減少したため。	総務企画
		年間1回以上ボランティア活動へ参加した生徒の割合	70%	58%	C	コロナ禍により、例年実施されるボランティア活動の大部分が中止となり、参加者の割合が減少したため。	総務企画

※1 「市呉スタンダード」については、国・数・英3教科で夏の課題テストと冬の課題テストに3割程度で導入。内容の基準を設け、毎年同じような内容で行う。内容は中学校卒業程度から高校1年の習った内容の基礎基本の問題にする。スタディサポートを参考に作成する。

【評価結果の分析】

<管理職>

I C T化によりペーパーレスが進み、印刷・配付・保存等の事務的業務量の削減が図られた。部活動時間については、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、部活動が制限される中で、土日や平日の勤務時間外における在校等時間が減少し、特に8～9月は目標を達成できた。項目9「先生から進路についてきめ細やかな指導を受けている」94.3%、項目10「学校生活や友人関係などの悩みや相談事などを親身になって聞いてくれる先生がいる」94.5%と肯定的評価が高いことから考えると、事務的業務量の削減が「生徒と向きあう時間の確保」につながっていると見えよう。

<教育研究部>

○授業評価アンケート

授業評価アンケートでは、年2回アンケートを実施し、第1回で最肯定の割合の平均値は72.3%であり、第2回では79.1%であった。このことは個人や教科での意識的な取組の効果があったものと考えられる。

○I C Tに関する研修

1年次生のiPad導入に伴い、5月13日・6月22日・1月5日に実施した。各回ともI C T機器を活用した授業を推進する上で、効果的な研修を行うことができた。

○E S D・S D G s

1年次生では、中間評価の66%から15%の上昇となった。S D G sの視点で職場訪問に取り組みせたり、食品ロスに関する小論文や各自のライフプランを書かせたりしたことで、評価が高まったと考えられる。2年次生では、中間評価の87%から13%低下した。年度の前半ではS D G sの視点で呉の持続可能な発展に対する具体策を考案させ、呉市役所の協力を得ながら取り組ませた。この取組は、持続可能な発展と社会貢献についてしっかりと考えさせる機会となり、意識を高めることができたと考えられる。また、後半では来年度の個人研究に向けて、研究内容・主題を決めるために、資料や先行研究、先輩の研究発表等から考えさせた。数値が下がったのは、生徒が自らの研究について検討を進める段階で、十分に先を見通せていないことに原因があると考えられる。現在、全教員による研究内容・主題決定のための面談を実施しており、来年度に向けて見通しを持たせるべく取組を行っている。3年次生では、中間評価の87%から1%の上昇となり、高い値を維持することができた。昨年同様、個人研究を行った。それぞれの研究で課題解決を実施しており、E S DやS D G sとの関連付けも行いながら指導に取り組んだ。研究結果の発表および卒業論文の作成で、研究内容を整理・改善していく中で、様々な面から考えることが可能となり、肯定的な意見が大多数を占めたと考えられる。

○読書活動

調査が1月までのため、10冊は達成していないが、9冊読破した生徒を含めると8.7%（1年次生7.4%、

2年次生 9.7%，3年次生 8.7%），8冊読破した生徒を含めると 13.4%（1年次生 12.1%，2年次生 12.9%，3年次生 15.1%）になる。各教科で図書資料を活用する授業を設定すれば，読書活動の推進になり読書冊数も増加すると考えられる。

<教務部>

- 昨年度より，定期考査の想定平均点と実平均点との差を±5以下にする取組についての分析を取り入れた。この度の対象は，第1学期中間考査と期末考査，第2学期中間考査，期末考査の4回である。第1学期中間考査については，43科目中18科目で達成率は42%，期末考査については，70科目中29科目で達成率は41%，第2学期中間考査については，43科目中20科目で達成率は47%，期末考査については，71科目中23科目で達成率は32%であった。以前から，定期考査では目標値の設定を行っていたが，検討することはしていなかった。昨年度初めて目標値の達成に向けて，教員の意識を統一したが，昨年度の目標値の達成率は29%であり，目標値との開きがかなりあった。しかし，1年間を通して，生徒の実態を把握し，授業に取り組んだ結果，多くの科目で目標値を正確に設定できるようになった。現在，求められている指導と評価の一体化が定着しつつあると考えられる。
- 特色ある科目において外部との連携を行っており，コロナ禍の中でも，専門的な知識を習得する機会を多く設定できた。
- 市呉スタンダードについては，1，2年次生の国語，数学，英語の3教科の3学期の課題テストまたは3学期に行った小テストに組み込んだ。スタディサポートの結果から，生徒が苦手とする問題を冬課題として示し，テスト範囲とした。1年次生の数学の結果については，30点中13.6点で得点率は45.4%あった。特に，数と式の問題2問の正答率は62%で最も高く，次に2次方程式の3問の正答率が57%であった。

<進路指導部>

- 「自律的学習習慣の確立」について，今年度はClassiの日々の学習時間入力状況で見取ることとした。昨年度から導入したClassiには，学校からの各種連絡やアンケート等の機能とともに，自己の生活を振り返る「学習記録」の項目がある。この入力については昨年度から100%を目指した取組を行っているが，達成は難しい状況だった。今年度に入り，各クラスに対し前週の入力状況を提示し，入力していない生徒には，放課後情報室等での入力支援を行った。達成率は，1年：71%，2年：86%，3年：82%であり，1年次生は「いつでも入力できる」ということが，逆に取組に対するゆるみを生んでいると考えられる。2・3年次生は昨年度からの取組が定着しているとも考えられるが，まだ徹底するまでには至っていない。また，学習時間は，「1日120分以上」という目安を達成した生徒は，平日平均で1年次生14%（21名），2年次生13%（20名），休日平均で1年次生20%（30人），2年次生20%（31人）となっており，自律的学習習慣の定着に大きな課題が残る。
- 「希望進路の実現」について，就職希望者は12名全員内定を得た。進学希望者は，総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜合わせて146名の進路先が決定した。

<生徒指導部>

- 現時点での遅刻状況は昨年度数値より多少増加している（1.24人）が，基本的な生活習慣に対する規範意識は定着している。一方，遅刻傾向の生徒には特別プログラムによる指導を実施しており，現在改善傾向にある。コロナ感染症に対する不安から欠席するケースもあり，遅刻・欠席数の増加に影響していると考えられる。
- 現時点で特別な指導対象の事案は5件発生している。生徒の規範意識に対する肯定的評価は99.3%を示している。全体的に落ち着いた学校生活が維持されてはいるが，細かな指導を要する場合も増えており，生徒の意識とのギャップが見られる。
- 「校則の見直し」が言われる中，髪型（ツーブロック）に関する服装規定変更に取り組んだ。生徒会が窓口となり，生徒や一般企業にアンケートを実施し，分析等を行い，変更案を作成し決定した。決定まで半年以上かけての生徒会の取組は，今後へも繋がっていくと考える。
- 教育相談に対する肯定的評価は，本年度94.5%で過去最高数値である。カウンセリングマインドに対する教職員の共通理解は深まっているが，教職員間のコミュニケーションに基づき協働していく観点から，今後は組織的な取組が求められる。
- 本年度もコロナ禍の影響はあるが，部活動の各種大会が開催されるようになり，本校らしく大いに実績をあげている。年間部活動計画を提示することで見通しのある部活動運営の定着を目指しているが，昨年同様コロナ感染症予防対策と部活動の共存の難しさを感じる場面が多々あった。

入学時の1年次生の部活動加入率が他学年と比較して極端に低い状況であったが（1年次生71.7%，2年次生85%，3年次生95%），高校生活に慣れたこともあってか，現時点で89%に増えた。

＜総務企画部＞

- コロナ禍の拡大により、感染予防対策をしながらの、ボランティア活動や姉妹校との交流など、教育活動のさまざまな面で制約を受けるという厳しい状況となったが、その中でも活動の保障に努めた。

【今後の改善方策】

＜管理職＞

各部において、顧問を中心に、短時間の活動であっても成果を挙げられる部活動を模索していく。ICT推進委員会及び業務改善推進委員会を中心に、ICT化による業務改善を推進する。業務改善が「生徒と向きあう時間の確保」につながるように、教職員の目的意識を高める取組を今後とも展開する。

＜教育研究部＞

○授業評価アンケート

今後も授業交流や研修会を通じて、授業方法の改善を図る。また、ICT機器の効果的な利用についての視点を入れた、研究授業の実施も引き続き行っていきたい。

○ICTに関する研修

ICT機器を活用した授業を推進するために必要な研修を次年度も適宜行い、指導力の向上を図る。

○ESD・SDGs

1年次生では、ライフプランの作成を通じてICT活用力が向上した。一方、今年度は、コロナ感染症蔓延により、3年生のフロンティアⅡ全体発表会を見学できていないため、来年度は、研究における調査活動のノウハウや分析力、表現力の向上を意識してフロンティアⅠを行っていききたい。2年次生には、研究主題設定の場面で、1年次から取り組んでいるSDGsの目標を意識して取り組ませている。持続可能な社会の実現のための解決策を考えることに加えて、生徒が自身の活動をきちんと意識できるように指導する。3年次生は、卒業論文を作成する過程で、研究の広がりや社会とのつながり、ESDやSDGsとの関連を指導することで、様々な側面から考えるという視点を浸透させていくことができた。来年度も、本年度の成果を踏まえ、生徒に様々な側面や立場で物事を考えられるよう指導する。特に、先行研究を活用し、新たな視点で研究できるよう指導する。

○読書活動

図書委員で広報するだけでなく、各教科で図書室の資料を活用した授業を設定する。ICTを活用した反転授業を行う場合にも、家庭で読書をした結果を授業で交流するなど、指導者が図書を活用する授業を仕組むことで、読書冊数は伸びると思われる。

＜教務部＞

- 想定平均点については、生徒の実態をしっかりと把握した上で想定しなければならない。そのため、授業内での生徒の理解度の把握に努めることと、定期考査問題について教科内で吟味することが必要である。昨年度より改善されているので、引き続き、指導と評価の一体化をめざし、授業研究を行っていく。さらに、来年度は平均点が60点を想定した問題作りができるように、より授業研究を進めていきたい。
- 来年度は、さらに「呉学」の設置により、より特色ある授業が増える。この科目においても、他団体と連携しながら進めていきたい。
- 市呉スタンダードについては、課題テストで見取くことは実質難しく、本年度はうまく機能しなかった。来年度は、第1回目のスタディサポートの結果を分析し、第2回目のスタディサポートに間に合うように、授業内や課題で生徒に取り組みさせる。

＜進路指導部＞

- 「自律的学習習慣の確立」におけるClassiの入力状況の改善策については、以下2点を進路指導部から全教員に依頼している。更なる定着を旨として取り組みを継続する。
 - ①火曜日の取組後の入力状況を再度集計・各クラスに提示後、未入力生徒に対し、担任・副担任で入力指導を行う。⇒担任が各学年主任に報告する。⇒学年主任が進路指導主事に報告する。
 - ②入力に至る生徒の意識付けを、各担任・副担任だけに任せず、部活動顧問や学校の諸活動での関わりのある教員が声かけ・確認をして、把握・指導を行う。
また、併せてClassiの「ポートフォリオ」機能や「学習ドリル」機能等の活用を学年・教科主体で積極的に活用できるよう、事例等を紹介していく。
- 「希望進路の実現」について、3年次生に対する受験指導の状況把握をし（共有フォルダ内で確認可能）、生徒の志望を叶えるべく、組織的な動きをより促進していく。
また、学校評価（年度末）アンケートの結果によると、まだ進路決定に対する意識が確立できてい

ない生徒が1年次生で10.3%，2年次生で6%程いることがわかる。普通科とは異なり，各自の進路意識によって科目選択が多岐にわたる総合学科においては，進路希望をはっきりさせることなく学習や諸活動への取組を行うことは非効率であると考える。担任・学年団を中心に，生徒に関わる教職員全員で情報を共有し，早い段階からより細かな指導をしていく必要がある。

<生徒指導部>

- 目標値である1日1.0名以下の遅刻指導を継続していく。遅刻，欠席，早退等に関する規程について再度共通理解を図り，指導を徹底する。保護者との確実な連携や学年や分掌との速やかな連携等を徹底する。また遅刻傾向の生徒に対しては，基本的な生活習慣や精神面に対するサポート等を継続し，再発を防止する。
- 全教職員が生徒指導規程の共通理解のもと情報交換，情報共有を心掛け，多面的な生徒理解を図ることにより，組織的かつ継続的に生徒指導に取り組み，問題行動の未然防止に努める。そのため，共感的な人間関係を基盤とした生徒への声かけを行ったり，生徒指導の三機能を活用できる内容の研修会等を計画的に実施したりすることで，教職員個々の指導力の向上を図る。
- 1・2年次生は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で，伝統的に行ってきた様々な行事や大会（学校・部活動）を経験していない状況にある。来年度，新しい生活様式の中で教職員が各種行事や大会に向けた指導を計画的に行い，伝統の復活・継承を目指す。
- 計画的な部活動運営に対する共通理解を図るとともに，各部活動で実践しているコロナ感染症予防対策について情報交換，情報共有を行う。また，各種大会以外でも部活動に対する充実感を得られる取組を設定していく。

<総務企画部>

- 長引くコロナ禍のため，今年度において本校生徒が参加した校外でのボランティア活動は，5月に実施された「2021 呉子ども祭」など数件であった。校内では，8月に開催した本校のオープンスクールに際して，運営の補助にあたるボランティアを募ったところ，55人の生徒の参加があった。このことからうかがえるように，本校生徒のボランティア活動への意欲は高いといえる。引き続きコロナ禍が予測される状況において，呉市内の団体から，来年度5月と7月予定の行事における本校生徒のボランティア要請があった。来年度は地域の期待に応えながら，生徒のボランティア活動への参加をより活発にすることで，地域との結びつきを深めるとともに，生徒の人的成長をうながしていきたい。
- 安樂高級中學との相互訪問による交流は，今後も困難な状況が続くものと思われる。こうした状況の中，5月にブレマトン市のオリンピック高校，10月に昌原（チャンオン）市の大巖（デアム）高校との間でそれぞれ行ったオンラインによる交流が成果を上げた。安樂高級中學との交流においても，今後はオンラインによる交流を図りたい。

別紙:現状分析

外部環境	<p>O (支援的要因)</p> <p>①小・中学校, 高等専門学校, 大学等が隣接している。</p> <p>②PTAが学校に協力的である。</p> <p>③市呉の存在が市民から注目されている。</p> <p>④市内の各団体から支援を期待できる。</p>	<p>S (強み)</p> <p>①総合学科の特性を生かし, 多様な選択科目を設定している。</p> <p>②挨拶, マナー, 時間厳守, 服装等の生活規律が徹底している。</p> <p>③地域・社会に貢献しようとする意欲が旺盛な生徒が多い。</p> <p>④部活動が活発で, 多くの部が上位大会進出を果たしている。</p> <p>⑤教育相談体制が整備されている。</p> <p>⑥本校への進学希望者が多く, 中学生からの支持を得られている。</p> <p>⑦「産業社会と人間」から「フロンティアⅠ・Ⅱ」に至る一連の取組が進路実現に有効である。</p>	内部環境	<p>「支援的要因と強みを生かす」</p> <p>○近隣の教育資源等の活用を促進する。</p> <p>○PTAと連携し, 協働して教育内容を創造する。</p> <p>○総合学科の特性とESDの研究指定の成果を生かして, 身に付けさせたい9つの資質・能力の育成を図ることにより, 生徒の進路実現につなげる。</p> <p>○生徒の学力の向上, 規範意識や社会性, 奉仕の精神を涵養する指導を充実し, 市民等から誇りに思われる生徒を育成する。</p> <p>○部活動の充実により, 自己肯定感を高めつつ, 活動実績へとつなげていく。</p>
	<p>T (阻害的要因)</p> <p>①県立学校教員との人事交流が少なく, 教職員の年齢構成の偏りが解消されない。</p> <p>②情報不足や入手の遅れ等のため県立学校と帯同した動きが困難な場合がある。</p> <p>③生徒の多様な進路目標に対する対応力を高め切れていない。</p>	<p>W (弱み)</p> <p>①高い目標を実現しようという意欲や態度を十分には育成できていない。</p> <p>②一般入試で求められるレベルまで基礎学力を高め切れていない。</p> <p>③家庭学習時間が少ない。</p> <p>④多様な選択科目の開設に必要な選択教室や実験・実習室等が不足している。</p>		<p>「阻害的要因と弱みを克服」</p> <p>○校内授業研究を充実するとともに他校の公開研究授業等に積極的に参加する体制を整える。</p> <p>○ESD・SDGsの視点を取り入れ「産業社会と人間」「フロンティアⅠ・Ⅱ」の系統性を高め, 学際的な深い学びを実現する。</p> <p>○個別指導の徹底とその支援体制を構築し, 進路実現につなげる。</p> <p>○学校の方針や情報等を積極的に発信する。</p> <p>○様々な機会を捉えて生徒・保護者に進路情報を提供し, 低学年次から段階的に進路意識を高める。</p>

1 生徒の高い志や夢を実現する。

- 総合学科としての特色を生かした教育活動の充実を図る。
 - ・キャリア教育を柱に, 生徒一人一人が自立した社会人・職業人として将来を展望し, その実現のために必要な教科・科目を適切に選択できるよう, 教育課程を編成・実施する。
 - ・地域社会の担い手としての素養を高め, 持続的発展が可能な社会の構築のために行動できる人材を育成する。その実現に向けて教育活動の体系化・構造化を図り, 「地域課題解決型キャリア教育」のカリキュラム開発と実践を行う。
- 希望する進路を確実に実現できる学力を身に付けさせる。
 - ・「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき, 主体的・能動的で学習者基点の深い学びを促進する授業づくりを行う。
 - ・発問の工夫, ICT機器の活用, ESD・SDGsの視点を取り入れた授業改善を推進し, 生徒に自律的学習者としての意欲と態度を身に付けさせる。
- 教科学習や部活動の成果として, 各種大会・コンクール, 資格取得等で全国レベルの実績をあげる。

2 地域の誇りとなり得る高校となる。

- 生徒指導を徹底し, 自立した社会人としての規範意識や社会性を涵養する。
 - ・全教職員で生徒指導規程の共通理解を図り, 統一的な指導を行う。
 - ・学校生活において生徒指導の三機能を生かした指導を行う。
- ボランティア活動のさらなる充実を図り, 貢献の意識を醸成するとともに「学び」との連結を図る。
- 学校情報を積極的に発信し, 保護者や地域の期待に応えるとともに, 本校の教育力を生かして, 小・中学校教育の充実・発展に寄与する。
- 不祥事を許さない組織風土を醸成するとともに, 教育活動のあらゆる場面において, 生徒・保護者・地域から信頼される教職員の姿を示す。